ふるさと御所 文化財探訪

⌘其の二十八⌘

古墳時代〈16〉
葛城氏の盛衰（5）
室宮山古墳と極楽寺ヒビキ遺跡

生涯学習課 文化財係
☎内線696

写真1　室宮山古墳の大形家形埴輪
（転載許可：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）

昭和25年の室宮山古墳後円部南石室の発掘調査では、石室の真上の位置から、片面に直弧文（直線と円弧が組み合わされた文様）が刻まれた、扁平な箱形の埴輪が数点出土していました。不明埴輪とされていたこの埴輪は、調査後45年を経た平成7年、橿原考古学研究所附属博物館の千賀久さんによる再整理の結果、大形の家形埴輪の柱であることが判明しました。復元された家形埴輪（写真1）は総高1.2mという類稀な巨大なもので、「葛城襲津彦の館の埴輪か？」と当時大きな話題になったものです。

さらにその後10年を経た平成17年、再びこの埴輪は脚光を浴びることになります。県営ほ場整備事業に伴い発掘調査された極楽寺ヒビキ遺跡で、濠と塀に囲まれた方形の区画の中に、四面に縁を持つ大形の堀立柱建物が検出された（写真2）ことがその発端です。

掘立柱建物の柱は、通常は伐採した木をそのまま使用するので断面形は円形になります。ところが極楽寺ヒビキ遺跡の大形掘立柱建物の本体（身舎）の柱は、わざわざ巨大な木材を幅60～81㎝、奥行き10～13㎝の断面長方形に加工してあり、調査ではその形が痕跡となって検出（写真3）されました。これは冒頭に述べた、直弧文が刻まれた箱形の埴輪の形状にまさに合致することになります。

極楽寺ヒビキ遺跡は遺物の出土量が少ないことが特徴の一つとなっています。このことから極楽寺ヒビキ遺跡は、館などの生活の場や祭祀を行った場とは考えがたく、おそらくは政務を執った公的な場ではなかったかと推測されます。時期は室宮山古墳に比して若干遅れるものです。したがって、室宮山古墳の被葬者が仮に葛城襲津彦であったとしても、極楽寺ヒビキ遺跡は襲津彦そのものにかかわる遺跡というわけではなく、葛城氏の次代の盟主（例えば玉田宿禰など）が用いた施設とみるべきでしょう。

ただ、特定の古墳およびそこから出土した埴輪と、同じ地域に所在する実際の遺跡で検出された遺構（ここでは大形掘立柱建物）がこれほどまでに有機的に結びついた例は他にありません。また、極楽寺ヒビキ遺跡の大形掘立柱建物の柱には室宮山古墳の家形埴輪のような直弧文の装飾が施されていたと考えられるなど、両者は互いに補完し合って「葛城の王」が用いた施設のイメージをより豊かにしています。

写真2　極楽寺ヒビキ遺跡の全景
（転載許可：奈良県立橿原考古学研究所）

写真3　極楽寺ヒビキ遺跡の柱穴と柱の痕跡
（土層断面から角柱であることがよく分かる。）
（転載許可：奈良県立橿原考古学研究所）

【参考文献】　奈良県立橿原考古学研究所『極楽寺ヒビキ遺跡』（『奈良県文化財調査報告書』第122集）、2007年

（文責　藤田 和尊）

広報ごせ
2011. 1

★公共の場等では禁煙・分煙の徹底を★　子どもたちや妊婦、非喫煙者等を受動喫煙の被害から守ろう！